

「本法寺蔵《法華經曼荼羅図》の絵師に関する試論」

鷹野佳世子（日本学術振興会特別研究員 RPD）

富山・本法寺蔵《法華經曼荼羅図》は二十二幅に『法華經』二十八品の内容を絵画化した法華經美術を代表する絵画のひとつである。その規模の大きさは元より絵の精密さ、水墨技法を加味した山水描写など、図像の点でも様式の点でも、中世における重要な作例として注目されてきた。これまでに原口志津子氏、太田昌子氏らによって描かれる内容の比定、構図の分析、制作主体と伝来等の美術史的問題が検討されてきた。しかし、大画面に多数の場面を描く図柄の細かさに加え、二十二幅全幅を総覧できる展示機会が限られていたこともあり、特徴的ないくつかの図像を除いて筆致や表現描写の詳細な観察は進んでいなかった。

本発表では近年撮影された高精細画像を活用し、本図の構成要素である諸尊・人物・動植物・建造物といったモチーフ毎の表現的特徴を比較し、絵師の見分けを試みる。本図の絵師としては画中の墨書銘に「画工堪明」「画工口叟」という二名の名が確認されているが、具体的な担当の内訳は不明であった。本発表では、絵師の判断に関わる補彩補筆箇所を検討し、それを踏まえてモチーフおよび場面毎の筆致の分析を行うことで、本図における絵師の分業状況をできる限り明らかにする。

補筆補彩に関しては赤外線撮影画像も併せて確認したが、補彩に比べ、線描の加筆は比較的少ないよう見受けられる。従って、補彩が本来の筆致をわかりにくくしているものの、モチーフの形態そのものに大きな変化はないと判断した。モチーフ毎の観察では、人物のみならず動植物や建物にも筆致の巧拙、作画精度に差を見出すことができたため、諸尊や人物に補彩が施され本来の線質が判断し難い場面については、背景の山水、樹木、建物などの表現的特徴も併せて比較することで絵師の判別材料とした。

絵巻物における絵師の分業は料紙ごとに担当することが通常と考えられるが、本図は一幅の中に二名以上の絵師の手が感じられるものもあり、必ずしも一幅を一人の絵師が担当したわけではないことが想像される。少なくとも特徴の異なる二種類の筆致が見られ、加えて助手のような役割かと思われる絵師一名の存在も感じられる。本図の構図的特徴のひとつとして余白を挟んで場面毎の区切りが明確であることがあり、場面毎に担当を分けることは可能であったと見られる。

また、絵師の見分けを目的としたモチーフ観察、赤外線画像による線描観察を通して、本図の作図に際してはかなり高精度の下図、手本を用いた可能性が指摘できた。繰り返し登場するモチーフにも図柄の使いまわしはほとんどなく、本図を手掛けた絵師工房が豊富な絵手本を有していたことが考えられる。大画面説話画の制作手法を考える上で示唆的であり、中世の作画技法を伝える点でも改めて重要な資料として位置づけられよう。